

コミュニケーション論

講師: 松尾 康弘

単位数: 1単位

時間数: 15時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害のある方々やその家族へ専門的に支援を行う。さらに医療においてはチームアプローチが必要であり、介護・福祉・教育の分野においても多職種との連携、つまりコミュニケーションが必要になる。

本科目では対人関係の感性と能力を磨き、臨床現場で円滑にコミュニケーションを図ることができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	コミュニケーションの基本的な心構えを理解する	講義・TBL	
2	他者との関係を築くコミュニケーション方法を理解する	TBL	
3	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
4	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
5	非援助者の理解と情報交換、行動化の支援について理解できる	講義・TBL	
6	チームワークとコミュニケーションについて理解できる	講義・TBL	
7	・視覚障害・聴覚障害のある被援助者とのコミュニケーション ・認知症のある被援助者とのコミュニケーション ・人生の最期を迎える被援助者とのコミュニケーションについて理解できる	講義・TBL	
8	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

■成績評価の方法

講義への参加態度(40%)・最終試験(60%)により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。60%未満の場合は再試験を実施し、60%以上を合格とする。再試験が60%未満の場合は再々試験を実施し、60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

必要に応じ資料を配布する

■備考

■実務経験

本科目は、公認心理師・言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

ことばとシンボルの世界

講師: 假屋園 昭彦

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

ある物を別の物で表現する機能をシンボル機能と呼ぶ。シンボル機能は人間の思考の大きな特徴の一つであり、人間の人間たるゆえんは、まさしくこのシンボル機能にあると言える。本講義では、人間の思考の代表的な特徴であるシンボル機能について考察する。まず人間のシンボル操作の学問である記号論における基本的用語、概念を紹介する。そのうえでシンボルの世界に生きる存在としての人間のあり方を紹介する。具体的には、言語、哲学、芸術の領域から代表的な理論と実例を紹介する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	シンボルの意味 記号論とはどんな学問で何を対象とするのか	講義	
2	記号論の基礎概念(1) ことばのしくみ	講義	
3	記号論の基礎概念(2) ことばの意味と意味作用	講義	
4	記号論の基礎概念(3) 文節と意味作用	講義	
5	記号としての言語(1):記号としての世界	講義	
6	記号としての言語(2):日常的な記号世界	講義	
7	記号としての言語(3):ソシュールの言語学:構造主義の誕生	講義	
8	記号としての言語(4):ソシュール言語学:構造主義の展開	講義	
9	記号としての言語(5):ソシュール言語学:構造主義と記号論	講義	
10	パースの記号論(1)	講義	
11	パースの記号論(2)	講義	
12	芸術における記号論:図像解釈学の紹介	講義	
13	芸術における記号論:図像解釈学の実例	講義	
14	民話・神話における記号論	講義	
15	文化記号論とはなにか	講義	

■受講上の注意

■成績評価の方法

筆記試験(100%)

■テキスト参考書など

谷口 一美:「学びのエクササイズ 認知言語学」, ひつじ書房

■備考

■実務経験

情報科学

講師:小牧 祥太郎

単位数:2単位

時間数:45時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

昨今、医療現場においても適切な情報活用・管理が求められている。適切な管理・運用が行えない場合、情報漏洩リスクが高まり、施設・個人に対して脅威を与えることとなる。本講義では、情報活用に関する運用や管理について学び、情報モラルに関する理解を深めた後、昨今医療機関でも通常業務として使用が一般的となっているコンピューターの使用に関して基本的な操作を習得していく。また、本校の情報通信環境を活用するほか、個人所有のパソコンコンピューター、スマートフォンを学習や情報取得手段としても有効に利用出来るようになり、情報リテラシーの向上を図る。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	学内の情報通信環境について理解を深め、使用環境を整備する。 (Free Wi-Fi、コンピューター室の利用、アクセス手段、端末・電源等の管理について)	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施予定。
2	本校において使用する、オンラインコミュニケーションツール(Microsoft Teams(以下、Teams))、メールソフト、クラウド、遠隔講義配信ツール(Zoom)などの情報通信環境の整備と利用の仕方について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
3	コンピューターの挙動を理解し、Windowsの基本操作になれる。 今後の学習や実習で使用に耐えうるコンピュータースペックについて知る。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
4	デジタルデータの管理について学び、情報管理について理解する。 Microsoft Office Word(以下、Word)の基本操作に慣れる。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
5	Wordの応用操作(図や表の挿入)を習得する。 Wordで作成したデータのPDFへの変換方法を習得する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
6	メールソフトの利用方法、メールマナーについて学ぶ。 (添付ファイルのPDF化処理など含む)	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
7	講義・学習で必要となる情報取得手段について学ぶ(文献検索・図書館利用法とオンライン検索方法など)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
8	各種成果物(レポート)等で根拠として使用する、引用文献の引用方法・リストの作成について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
9	Microsoft Office PowerPoint(以下、PowerPoint)の基本的な操作を学ぶ。 PowerPointにて自己紹介スライドを作成する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
10	作成したPowerPointの応用を学ぶ(アニメーションや図・表の挿入、効果的な使用など)。 PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
11	PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。 オンラインツールを用いて、自己紹介スライドへの好意的な評価を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
12	Microsoft Office Excel(以下、Excel)の基本的な操作を学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
13	Excelの基本操作を学ぶ(データ入力操作、簡易な計算(合計・平均)について)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
14	Excelの基本操作を学ぶ(書式設定等について)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
15	Excelの応用操作を学ぶ(条件判断・処理分岐など)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
16	Excelの応用操作を学ぶ(グラフの作成など)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
17	プログラミングを通して、論理的な思考・問題解決能力を学ぶ(Code.org®を用いて)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
18	言語聴覚士にとって必要となる知識について、分野ごとにまとめ、プレゼンテーション資料として作成を行い、関連するスマートフォンアプリの検索を行う。 (引用文献の引用方法の復習、情報取得手段の復習を兼ねて)	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
19	言語聴覚士にとって必要となる知識について、分野ごとにまとめ、プレゼンテーション資料として作成を行い、関連するスマートフォンアプリの使用感を調査する。 (グラフ作成などの復習を兼ねて)	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。

20	言語聴覚士にとって必要となる知識、関連するスマートフォンアプリについて、分野ごとにまとめた内容について情報共有を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
21	Word・Excelの基本・応用操作の復習を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
22	模擬試験(終講試験と同等水準の簡略版)を実施する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。 Word・Excelについて復習をしておくこと。
23	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。

■受講上の注意

毎回の成果物はクラウドにて保存を行う。それにあたり、Teamsのパスワードは把握しておくようとする事。
講義状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もある。また、講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験(100%)において60%以上とする。

■テキスト参考書など

適宜、資料を配布する。

■備考

基本的にコンピューター室にて講義を行う。

■実務経験

社会心理学

講師:大蔵 博記

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

対人関係並びに集団における人の意識、態度及び行動についての心の過程に関する、社会心理学の基礎的な知識と研究法を習得する。さらに、それらの知識を元に、社会での人間関係などの個人の問題から環境破壊や文化摩擦などの社会問題まで、多面的な視点から考察できるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1 オリエンテーション		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
2 原因帰属とステレオタイプ:差別を生み出す心理		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
3 自己と態度:自己欺瞞の心理		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
4 格差と公正:平等な社会を阻む心理		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
5 メディアの影響:社会のフィルターを知る		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
6 進化してきた心:ヒトの社会性の起源		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
7 身近な人間関係:恋愛と家族		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
8 友人関係とネットワーク:絆としがらみが作る社会		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
9 社会的ジレンマ:集団での協力と裏切り		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
10 集団間葛藤:ウチとソトの対立		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
11 西洋と東洋の心の違い:文化的自己観と認知スタイル		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
12 文化と適応:文化差の起源を求めて		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
13 幸福感と社会:幸せとは何か?		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
14 社会心理学史:変遷する人間観		講義・討論	ミニツツペーパーの提出。
15 終講試験およびまとめ		講義・討論	

■受講上の注意

毎回、討論を行う予定のため、積極的・主体的に参加すること。

■成績評価の方法

毎回のミニツツペーパー30%と終講試験70%

■テキスト参考書など

教科書:なし

参考書:社会心理学, 有斐閣。社会心理学キーワード、有斐閣。その他、適宜紹介する。

■備考

資料プリントは適宜配布する。

■実務経験

統計学

単位数:1単位

時間数:30時間

講師:島 義弘

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

統計学的な考え方を理解し、統計学の基本的な知識を修得することを目標とする。この科目を通して、実際のデータを扱う中で、適切な統計処理を施し、正しく報告・解釈できるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	統計学の概要を理解できる	講義	該当箇所の復習(教科書, レジュメ)
2	尺度水準を理解し、データの図表で表すことができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
3	代表値の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
4	散布度の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
5	標準化の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
6	相関係数の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
7	推測統計学の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
8	母集団と標本について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
9	正規分布について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
10	不偏性について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
11	統計的仮説検定の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
12	2つの平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
13	3つ以上の平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
14	カテゴリ変数の連関を調べることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
15	終講試験とまとめ		筆記試験

■受講上の注意

欠席をしないこと。演習課題には積極的に取り組むこと。私語は厳禁、ただし、講義中の演習課題で分からぬところは積極的に教員や他の受講生に質問し、理解に努めること。

■成績評価の方法

終講試験100%

■テキスト参考書など

『公認心理師ベーシック講座 心理学統計法』 芝田征司(著) 講談社

■備考

教科書のほかに、レジュメを配布する。電卓(タブレット等の電卓機能で可)はあったほうがよい。

■実務経験

心理学 I

講師:山下 協子

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

「こころ」の問題は、特定の人たちの問題ではなく、私たちすべての人間の人生や生活に密接に関係している。本講義では、「こころ」の問題に興味をもち、取り組む姿勢を自分自身で考えることができるようになるために、様々な状況での感覚を体験する体験学習を交えながら、基礎となる心理学および臨床心理学について概説していく。心理学および臨床心理学の基礎的な知識を習得し、心理学の用語や療法等について説明できるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	心理学・臨床心理学および臨床心理士とは何かを知る	講義・GW	特になし
2	「心理学の歴史と方法」「心の発達」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
3	「感覚と知覚」「学習」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
4	「記憶と思考」「動機づけと情動」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
5	「性格」「対人関係と集団」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
6	「精神分析」「分析心理学」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
7	「クライエント中心療法」「行動療法」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
8	「心理臨床に必要な精神医学の知識」「心理臨床に必要な心身医学の知識」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
9	「発達検査および知能検査」「質問紙法検査」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
10	「投影法検査」「心理療法の技法」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
11	統合失調症について知る(映画鑑賞①)	講義	統合失調症について復習しておく。
12	統合失調症について知る(映画鑑賞②)	講義・GW	統合失調症について復習しておく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。映画の感想レポートを課す。
13	「カウンセリングとは何か」について知る	講義・GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
14	「傾聴とは何か」について知る	講義・GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
15	終講試験およびまとめ		事前に配布する問題集を参考に復習しておく。

■受講上の注意

講義はテキストに沿って進める。当日レジメを配布するが、事前に該当する章を読んで臨んでほしい。体験を目的とする学習材料をほぼ各回で用意する予定であるが、私語などせず真摯に取り組み、グループワークの際には積極的に意見を述べてほしい。

■成績評価の方法

平常点10%、レポート10%、試験80%により総合的に評価する。

■テキスト参考書など

- ・テキスト:『基礎から学ぶ心理学・臨床心理学』山 祐嗣・山口 素子・小林 知博 編著;北大路書房
- ・授業での配布資料

■備考

講義用のレジメや資料は適宜配布する。

■実務経験

英語 I

単位数:2単位

時間数:30時間

講師:飯田 敏博

必修選択:必修

授業学年:1学年

■科目目標

日常英語において、「センテンス・レベル」のライティングだけでなく、「パラグラフ・レベル」のライティングにも対応できることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	進行形を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
2	未来形を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
3	助動詞can, may, willを使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
4	助動詞must, shouldを使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
5	受動態を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
6	比較表現を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
7	不定詞を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
8	現在完了を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
9	分詞を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
10	動名詞を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
11	前置詞の使い分けを理解した英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
12	間接疑問文を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
13	接続詞の使い分けを理解した英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
14	関係代名詞を使った英文を作ることができる	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。テキスト、英和辞典、あるいは電子辞書(英和・和英のほか英英辞典の機能がつくとさらに良い)を必ず持参すること。

■成績評価の方法

試験(80%)、授業への参加態度(20%)

■テキスト参考書など

テキスト:Three-line Writing in English(日常英語ライティング入門) 成美堂

■備考

資料のプリントは適宜配布する。

■実務経験

英語 II

単位数:2単位

時間数:30時間

講師:飯田 敏博

必修選択:必修

授業学年:1学年

■科目目標

文法・語法を学び、英文構成力を身につけ、豊かな表現力をもった英語が話せ、書けることを目標とする

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Be動詞、Have動詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
2	一般動詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
3	名詞、冠詞、代名詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
4	現在形、現在進行形を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
5	過去形、過去進行形、未来形を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
6	現在完了、過去完了、未来完了の時制を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
7	疑問詞、助動詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
8	助動詞の応用力を身につける	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
9	形容詞、副詞、受け身を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
10	同等比較、比較級、最上級を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
11	不定詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
12	分詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
13	動名詞、接続詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
14	関係詞を理解する	講義・GW 音読を含む予習・復習をすること	
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。テキスト、英和辞典、あるいは電子辞書(英和・和英のほか英英辞典の機能がつくとさらに良い)を必ず持参すること。

■成績評価の方法

試験(80%)、授業への参加態度(20%)

■テキスト参考書など

テキスト:Keystone-Grammar-based English Writing- (基本英文から現代英語表現へ)成美堂

■備考

資料のプリントは適宜配布する。

■実務経験

保健体育

講師:廣田 大悟、富安 恵子

単位数:2単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

バレーボール及びバスケットボールの基本的な動きを身につける。さらに、スポーツを通じて、コミュニケーション能力の向上やストレスの軽減を図り、日常生活の中で、運動をする習慣を身につける。

また、健康について考え方理解し、健康的な生活を送れるようになる。健康はさまざまな要因の影響をうけているが、それらは、「人間の生物としての側面」「生活習慣」「環境」「保健・医療サービス」の4つに分けて考えることができる。

本講義では、保健・医療サービスの概要を知るとともに、疾病の予防や健康増進に関する保健師・看護師の具体的活動や役割について学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	科目目標をしっかりと理解し、バレーボール及びbasketballのルールをしっかりと理解できる。	講義・実技	教室でガイダンスを行い、体育館へ移動するので体育ができる服装に着替えてから、教室で待機する
2	パス及びサーブができる(バレーボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
3	ゲームでの一連の動きができる(バレーボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
4	自分たちでゲームの運営ができる(バレーボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
5	バス、ドリブル及びシュートができる(バスケットボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
6	ゲームでの一連の動きができる(バスケットボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
7	自分たちでゲームの運営ができる(バスケットボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
8	健康(健康・生活習慣病・食育・運動・休養・喫煙)について理解できる	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読んでおく
9	健康(飲酒・薬物乱用・感染症・応急手当・心の健康)について理解できる	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読んでおく
10	総復習及び試験	講義筆記試験	
11	看護職とは何か、保健師、助産師、看護師の役割について	講義DVD	看護職についてのイメージをまとめてくる
12	様々な場における看護師の役割と具体的活動	講義DVD	講義資料を必ず持参する
13	保健所における保健師の役割と具体的活動	講義GW	GWの時は活発に意見を交わす
14	市町村における保健師の役割と具体的活動	講義GW	GWの時は活発に意見を交わす
15	事例を通して疾病の予防や健康増進に関しての保健師・看護師の役割と他職種との連携のあり方を考える 発表後レポート作成	GW試験	自分の意見をまとめて臨む

■受講上の注意

運動できる服装及び体育館用運動シューズを用意すること。忘れ物の無いようにし、規範意識を持ち、積極的に講義に臨むこと。配布する資料を忘れずに、講義内容はこまめに追記し、主体的に臨んでください。

■成績評価の方法

平常点(30%)、実技点(40%)、試験・課題レポート(30%)により、総合的に評価する

■テキスト参考書など

特になし
必要な場合は、適宜プリントを配布する

■備考

適宜、資料を配付

■実務経験

本科目の11講以降は、看護師・保健師として実務経験のある教員による授業である。

医学総論

講師:青山 公治、山下 佐英

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

医療従事者にあっては、患者の健康事象はその患者を取り巻く生活要因と地域社会と密接に関わっているという視点をもつことが必要である。そのような意味で、将来、公衆衛生的素養をもった言語聴覚士として活躍するために必要な基礎的知識・技術および習慣・態度を身につけること。

そして、医学では、人間の健康について、さらに病気の原因やしくみ、症状、所見、身体構造の変化を明らかにした上で、病気と対峙する。医学とは、病気を乗り越えて健康を維持しようとする人間の知的活動であり、その医学に基づく行為が医療である。

本授業では、各章毎に解説を加え、豊富な学識を体得することを目標としている。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「健康と公衆衛生学」 健康の概念と健康の決定因子を説明できる。公衆衛生学の目的とそれを達成するための方法を説明できる。	講義	配布資料、教科書、板書に基づき講義を進める。予習は教科書、復習は配付資料、板書記録および教科書を見返し整理すること
2	「保健統計」 集団としての健康水準をはかる健康指標を列挙し、主な指標についてわが国の動向を説明できる。	講義	
3	「疫学」 疫学という科学の目的を説明できる。病気の発症要因と結果という関連性及び因果性を検証する疫学研究の方法を説明できる。	講義	
4	「疾病的予防」 広義の予防医学の3段階のプロセスを説明できる。感染症の感染成立要因を説明できる。主な生活習慣病のリスク要因を列挙できる。	講義	
5	「母子保健」 地域における母子保健活動の目的とその現状と対策を説明できる。	講義	
6	「産業保健」 産業保健活動の目的を説明できる。主な職業病を列挙できる。	講義	
7	「環境保健」 健康はヒトと生活環境の諸要因との相互作用によって成立していることを具体的に説明できる。上下水道および廃棄物処理の法的整備について説明できる。	講義	
8	健康について、また医学の歴史、医療の基本が理解できる。	講義	テキストの健康、医学の基本、医療の現場を読んでくる。
9	病気の基本、また診断と治療、予防について理解できる。	講義	テキストの病気の基本・分類、診断、治療、予防医療を読んでくる。
10	「終講試験とまとめ」	試験・講義	

■受講上の注意

教科書、配付資料及び板書に基づき授業を進めるが、公衆衛生に関する社会情報に日頃から関心を持ち、理解を深めること。

■成績評価の方法

終講試験

■テキスト参考書など

厚生の指標「国民衛生の動向」(厚生労働統計協会)、公衆衛生学 社会・環境と健康 2022年版、医歯薬出版
日野原重明 医学概論、医学書院

■備考

■実務経験

本科目は、医師として実務経験のある教員による授業である。

医療倫理

講師: 松尾 康弘

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

日本言語聴覚士協会における倫理綱領序文では「言語聴覚士は、自らの責任を自覚し、人類愛の精神のもと、全ての人々に奉仕する」と記されている。言語聴覚士は普遍的に他者を尊重し、自己研鑽を積み、対象者と社会に対して最善を尽くさなければならない。本科目では、臨床において、対象者の人生観や価値観を尊重し、本人のQOLの向上やwell-beingに寄与できる倫理観を得ることを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	人間の尊厳を考える	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
2	倫理4原則について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
3	対象者の自己決定を尊重することの意義について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
4	告知について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
5	身体拘束と行動コントロールの倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
6	守秘義務とその解除・個人情報保護について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
7	希少な医療資源の公正配分について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
8	終末期医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
9	終末期医療(DNAR)の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
10	生殖補助医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
11	遺伝性疾患における倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
12	摂食・嚥下障害の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
13	医療者－患者(対象者)関係について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
14	倫理コンサルテーションについて理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
15	試験・解説		試験・解説

■受講上の注意

毎講義終了後、ワークシートを提出してもらいます。

■成績評価の方法

講義への参加態度(20%)・ワークシート提出(40%)・試験(40%)により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。60%未満の場合は再試験を実施し、60%以上を合格とする。再試験で60%未満の場合は再々試験を実施し、60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

■備考

■実務経験

本科目は、公認心理師・言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

人体の構造・機能・病態 I

講師: 津山 新一郎

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

人体の構造・機能・病態 I での解剖学の全体的な理解を深めるというより、言語聴覚療法士として関係のある解剖の内容に限定して理解を深めることを目指す。項目的には以下の事項の理解に注力する。細胞については細胞膜表面の構造と機能との関連について。神経系については中枢神経と末梢神経の関係について特に言語活動との関連で脳神経 VIII, IX, X の理解を深める。伝音系、感音系における聴覚器の構造の理解。咽頭・喉頭の全体的成り立ちと声帯の構造、動作機能の働き等の理解を深める。授業の進め方については受け身で講義を聞くのではなく積極的に参加することを目指す事を目的として、具体的には教室全員をグループ分けし、テーマを決めて各自で調べ、発表を行う「Group Working」と講義を並行する。さらに各項目での要点・重点の抽出、何がポイントになるか提示を行わせる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ヒト発生の概略: 胚発生、器官発生、咽頭弓(鰓弓)などを理解できる。特に咽頭弓由来の器官について理解できる。	講義と演習	ヒト発生期間の胚期、胎児期などの理解。器官形成における過程などの理解を深める。
2	消化器系: 口腔、消化管(食道、胃、小腸、大腸)、消化腺(肝臓、胆嚢、脾臓)。器官全体の総合的な理解を図る。特に上部消化管の構造と肝・胆・脾臓についての理解ができる。	講義と演習	消化管と消化腺に分けて系統立てて栄養摂取との関連で理解。
3	嚥下について: 嚥下に関わる食道までの器官である舌、咽頭、喉頭の解剖的理解と、嚥下における働きと機能について解剖学的に理解できる。 グループワーク ①	講義と演習, group work	食塊を取り込む際の咽頭での振り分け機構と支配神経の関係の理解。
4	呼吸器系: 鼻腔、気道、呼吸部における系の全体的構成が理解できる。咽頭・喉頭部の構成、気管支から肺胞迄を理解できる。	講義と演習	上気道・下気道、気管支の分岐、肺胞におけるガス交換の意義と構造、生理学との関連性。
5	発声について: 咽頭から喉頭まで構造が理解できる。声門部分の構成、発声時の声帯の動き、声門製の動きに関わる筋が理解できる。 グループワーク ②	講義と演習, group work	咽頭と喉頭の成り立ちの詳細。発声器としての声門の構造と筋の運動、支配神経の関連性。
6	神経系: 概論、神経系の成り立ちが理解できる。ニューロンの成り立ちが理解できる。神経系の機能としての運動・知覚ニューロンが理解できる。	講義と演習	神経系の機能と刺激の伝達に関して細胞レベルとニューロンの関連付け。
7	中枢神経: 脳の構成、各脳の機能、伝導路について理解できる。脊髄の成り立ち、機能が理解できる。 □ グループワーク ③	講義と演習, group work	脳の構成と機能の局在の関連性についての理解をすすめる。
8	末梢神経: 脳神経12対の中でも特に V, VII, VIII, IX, X, XII の分布、機能について理解出来る。	講義と演習	末梢神経の中でも咽頭・喉頭における作用と聴覚・発声に関する神経の働きを系統立てて理解する。
9	末梢神経: 脊髄神経の中でも特に呼吸筋支配、上・下肢の運動支配神経、デルマトームの理解ができる。 中間テスト	講義と演習	筋運動と皮膚知覚を脊髄分節として理解する。
10	感覚器系 聴覚器の成り立ちが理解できる。伝音系である外耳から中耳までが理解できる。	講義と演習	聴覚器(伝音系)における音のとらえ方を順序立てて明確化する。
11	感音系である内耳の成り立ち、コルチ器の構造、聴覚伝導路が理解できる。 □ グループワーク ④	講義と演習, group work	蝸牛管 コルチ器における音波振動の神経系における電気信号に変える機構の理解。
12	平衡覚器 平衡覚の概念が理解できる。半規管の成り立ちと働き、球形囊・卵形囊における平衡斑の成り立ちと働きが理解できる。 □ グループワーク ⑤	講義と演習, group work	平衡覚における知覚を運動方向覚、重力方向覚の成分捕捉として区別を明確にする。
13	視覚器、味覚・嗅覚器の構成が理解できる。特に感覚細胞の構成が理解できる。視覚路、味覚・嗅覚路が理解できる。 グループワーク ⑥	講義と演習, group work	視覚、味覚、嗅覚などの感覚器の働き作用を区別する。
14	言語・聴覚系における解剖学からみた感覚器と神経系の総括	講義と演習	発音器官、構音器官と呼吸・消化器官の関連を神経、筋運動と関連づける。
15	終了試験とまとめ		

■受講上の注意

膨大な情報を要領よく、系統的に理解する。ばらばらな知識は役立たない。人に対する尊厳を忘れない。

■成績評価の方法

中間試験30%、終講試験70%、平常点(受講態度)等を総合して行う。

■テキスト参考書など

教科書: 言語聴覚士のための解剖・生理学 小林靖著 医歯薬出版。参考資料: 標準解剖学 坂井建雄著 医学書院。

■備考

プリント資料: レジュメを用意するので目を通しておくこと。

■実務経験

人体の構造・機能・病態 II

講師: 笠井 聖仙

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

「人体の構造・機能・病態 II」を通して、高度に複雑化した人体の生存に必須の機能について学習するが、次のようなことを目標にして学習してほしい。

- 1 人体を構成する基本的な細胞や組織の機能について説明できる。DNAの異常における病態を説明できる。
- 2 約1日のリズムである概日リズムをそのメカニズムとリズム異常による疾病や医学における応用について説明できる。
- 3 身体が外界からの刺激を感じし応答する特殊感覚や神経系の基本的な機能について説明できる。
- 4 内分泌系が神経系と密接に関連してはたらき、人体のあらゆる細胞の活動を制御することを説明できる。内分泌系の異常による疾病を説明できる。
- 5 筋は身体の運動だけでなく、食物や尿などが消化器系や泌尿器系を運ばれるのに役立つことを説明できる。
- 6 終講義テストと講義

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	一般的な細胞の機能を理解し、細胞膜の主な機能を理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
2	細胞内小器官や核の主な機能を説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
3	概日リズムが内因性のものであり、その具体的な例とメカニズムについて理解し説明できる	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
4	概日リズムが各種生理機能に見られ、疾病の発現に関与することを具体的な例をあげて理解し説明できる。また、概日リズムの乱れにより胃腸障害、循環器障害、睡眠リズムの乱れが起こることを理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
5	外界の刺激が特異的受容器により感知され、脳への投射に活動電位という信号で伝えられることを理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
6	聴覚と平衡感覚受容機構を理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
7	嗅覚・味覚の受容機構とそれらの社会的意義について説明できる。生きるための味覚、楽しむための味覚の違いについて説明できる。味覚障害はどのようなものがあるか、その治療法について理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
8	生体の警告信号系としての痛みについて理解し説明できる。慢性痛発症機序について理解する。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
9	ホルモンであるバソプレシン、メラトニン、成長ホルモン、甲状腺ホルモンの分泌機序とその作用について説明できる。これらホルモンの分泌異常で起こる病態について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
10	ホルモンである副腎皮質ホルモン、副腎髄質ホルモンの分泌機序とその作用について理解し説明できる。副腎皮質ホルモンの分泌以上によって起こる病態について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
11	自律神経系の働きについて説明できる。特に、内臓を支配する迷走神経(副交感神経)の働きを理解する。自律神経系とホルモン分泌との関連について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
12	3種の筋組織の基本的な機能と骨格筋フィラメントの収縮に対する役割を説明できる。反射の種類と反射弓の構成要素をあげ説明できる。自律神経系による平滑筋の調節について理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
13	筋肉の神経支配について説明できる。筋肉を支配する運動神経が乳幼児の時期にシナプス回路網が一旦増加し、成長するにつれて脱落する。その意味合いについて理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
14	心臓の神経支配と体液支配および心電図波形発生メカニズムについて説明できる	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

教科書を基にしたテキストを配布し、自学自習できるように問題集も配布する。授業では、図や表をもとにパワーポイントで解説するが、その内容を理解するために、配布したプリントに事前に目を通し、授業で得た知識をもとに、さらに復習問題や確認事項にも積極的に取り組んでほしい。

■成績評価の方法

終講試験(85%)・平常点(15%)。平常点は出席と受講態度をもって評価する

■テキスト参考書など

テキスト:「人体の構造と機能」第4版 エレイン・N・マリープ著 林正 健二ほか訳、医学書院 参考書:「よくわかる生理学の基本としくみ」當瀬 規嗣著 秀和システムほか

■備考

授業内容の要約プリントは前もって配布する。

■実務経験

音声・言語・聴覚医学 I

講師: 津山 新一郎

単位数: 2単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

人体の構造・機能・病態 I での解剖学の全体的な理解を深めるというより、言語聴覚療法士として関係のある解剖の内容に限定して理解を深めることを目指す。項目的には以下の事項の理解に注力する。細胞については細胞膜表面の構造と機能との関連について。神経系については中枢神経と末梢神経の関係について特に言語活動との関連で脳神経 VIII, IX, X の理解を深める。伝音系、感音系における聴覚器の構造の理解。咽頭・喉頭の全体的成り立ちと声帯の構造、動作機能の働き等の理解を深める。授業の進め方については受け身で講義を聞くのではなく積極的に参加することを目指す事を目的として、具体的には教室全員をグループ分けし、テーマを決めて各自で調べ、発表を行う「Group Working」と講義を並行する。さらに各項目での要点・重点の抽出、何がポイントになるか提示を行わせる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ヒト発生の概略: 胚発生、器官発生、咽頭弓(鰓弓)などを理解できる。特にD19:AD25に咽頭弓由来の器官について理解できる。	講義と演習	ヒト発生期間の胚期、胎児期などの理解。器官形成における過程などの理解を深める。
2	消化器系: 口腔、消化管(食道、胃、小腸、大腸)、消化腺(肝臓、胆嚢、脾臓)。器官全体の総合的な理解を図る。特に上部消化管の構造と肝・胆・脾臓についての理解ができる。	講義と演習	消化管と消化腺に分けて系統立てて栄養摂取との関連で理解。
3	嚥下について: 嚥下に関わる食道までの器官である舌、咽頭、喉頭の解剖的理解と、嚥下における働きと機能について解剖学的に理解できる。 グループワーク ①	講義と演習, group work	食塊を取り込む際の咽頭での振り分け機構と支配神経の関係の理解。
4	呼吸器系: 鼻腔、気道、呼吸部における系の全体的構成が理解できる。咽頭・喉頭部の構成、気管支から肺胞迄を理解できる。	講義と演習	上気道・下気道、気管支の分岐、肺胞におけるガス交換の意義と構造、生理学との関連性。
5	発声について: 咽頭から喉頭まで構造が理解できる。声門部分の構成、発声時の声帯の動き、声門製の動きに関わる筋が理解できる。 グループワーク ②	講義と演習, group work	咽頭と喉頭の成り立ちの詳細。発声器としての声門の構造と筋の運動、支配神経の関連性。
6	神経系: 概論、神経系の成り立ちが理解できる。ニューロンの成り立ちが理解できる。神経系の機能としての運動・知覚ニューロンが理解できる。	講義と演習	神経系の機能と刺激の伝達に関して細胞レベルとニューロンの関連付け。
7	中枢神経: 脳の構成、各脳の機能、伝導路について理解できる。脊髄の成り立ち、機能が理解できる。 □ グループワーク ③	講義と演習, group work	脳の構成と機能の局在の関連性についての理解をすすめる。
8	末梢神経: 脳神経12対の中でも特にV, VII, VIII, IX, X, XIIの分布、機能について理解出来る。	講義と演習	末梢神経の中でも咽頭・喉頭における作用と聴覚・発声に関する神経の働きを系統立てて理解。
9	末梢神経: 脊髄神経の中でも特に呼吸筋支配、上・下肢の運動支配神経、デルマトームの理解ができる。 中間テスト	講義と演習	筋運動と皮膚知覚を脊髄分節として理解する。
10	感覚器系 聴覚器の成り立ちが理解できる。伝音系である外耳から中耳までが理解できる。	講義と演習	聴覚器(伝音系)における音のとらえ方を順序立てて明確化する。
11	感音系である内耳の成り立ち、コルチ器の構造、聴覚伝導路が理解できる。 □ グループワーク ④	講義と演習, group work	蝸牛管 コルチ器における音波振動の神経系における電気信号に変える機構の理解。
12	平衡覚器 平衡覚の概念が理解できる。半規管の成り立ちと働き、球形囊・卵形囊における平衡斑の成り立ちと働きが理解できる。 □ グループワーク ⑤	講義と演習, group work	平衡覚における知覚を運動方向覚、重力方向覚の成分捕捉として区別を明確にする。
13	視覚器、味覚・嗅覚器の構成が理解できる。特に感覚細胞の構成が理解できる。視覚路、味覚・嗅覚路が理解できる。 グループワーク ⑥	講義と演習, group work	視覚、味覚、嗅覚などの感覚器の働き作用を区別する。
14	言語・聴覚系における解剖学からみた感覚器と神経系の総括	講義と演習	発音器官、構音器官と呼吸・消化器官の関連を神経、筋運動と関連づける。
15	終講試験とまとめ		

■受講上の注意

膨大な情報を要領よく、系統的に理解する。ばらばらな知識は役立たない。人に対する尊厳を忘れない。

■成績評価の方法

中間試験30%、終講試験70%、平常点(受講態度)等を総合して行う。

■テキスト参考書など

教科書: 言語聴覚士のための解剖・生理学 小林靖著 医歯薬出版。参考資料: 標準解剖学 坂井建雄著 医学書院。

■備考

プリント資料: レジュメを用意するので目を通しておくこと。

■実務経験

認知・学習心理学

講師: 假屋園 昭彦

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

学習、知覚、知能、測定といった学習面に関する基本的な用語、現象、理論について理解する。これらの領域は、歴史が古く、心理学の中心的な領域であり、今後の心理学理解の土台になる。学習面では行動主義、認知主義の心理学を心理学史に沿って理解する。知覚は、精神物理学、ゲシュタルト心理学を中心に扱う。知能については知能の基礎理論と知能検査の歴史的変遷、測定についてはテスト理論について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	古典的条件づけ(1)(意味と種類)	講義	
2	古典的条件づけ(2)(消去、般化、弁別)	講義	
3	オペラント条件づけ(1)(意味と種類)	講義	
4	オペラント条件づけ(2)(行動主義心理学の理論)	講義	
5	行動療法の考え方と種類	講義	
6	技能学習	講義	
7	社会的学习(模倣、観察学习)	講義	
8	知能(1)(知能の諸理論)	講義	
9	知覚(1)(ゲシュタルト心理学)	講義	
10	知覚(2)(精神物理学) 知覚(3)(錯視、知覚の諸現象)	講義	
11	テスト理論(信頼性、妥当性)	講義	
12	テスト理論(標準化、偏差、Z得点などの基本用語)	講義	
13	知能(1)(知能の諸理論)	講義	
14	知能(2)(知能検査の発展過程)	講義	
15	知能(3)(知能検査の種類)	講義	

■受講上の注意

■成績評価の方法

定期試験

■テキスト参考書など

森敏昭他:グラフィック認知心理学、サイエンス社 実森正子:学習の心理—行動のメカニズムを探る—、サイエンス社

■備考

■実務経験

発達心理学

講師:島 義弘

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

人の生涯にわたる波多津を、心理学の観点から理解することを目標とする。発達段階ごとの特徴や課題を学び、将来、ヒューマンサービスに従事する専門職としての素地を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発達心理学とは	講義	該当箇所の復習(教科書, レジュメ)
2	発達の理論	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
3	身体と運動の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
4	認知の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
5	言葉の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
6	知能の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
7	感情の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
8	道徳性の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
9	対人関係の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
10	乳幼児期・児童期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
11	青年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
12	成人期・老年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
13	キャリア発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
14	発達の遅れと障害	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
15	終講試験とまとめ		筆記試験

■受講上の注意

教科書またはその他の資料を用いて、予習をしてくること。授業中は積極的な参加を求める。

■成績評価の方法

終講試験100%

■テキスト参考書など

『公認心理師スタンダートテキストシリーズ12 発達心理学』林 創(編著)ミネルヴァ書房

■備考

■実務経験

日本語学

講師: 奥村 三菜子

単位数: 1単位

時間数: 15時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

- ① 様々なポイントから日本語のしくみを理解し、他の人にも簡単に説明できる。
- ② 自分がどんな日本語使用者であるのかを客観的に振り返ることができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	私のことばを知る: 自分の母語について客観的に振り返ることができる	GW・講義	4年間学び合うクラスメートのことを知る機会として、積極的にワークに参加してください。
2	日本語のことばと文字①: 日本語の語彙の種類の特徴がわかる	GW・講義	
3	日本語のことばと文字②: 日本語の文字と表記の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを活用します。
4	日本語のルール: 文法から見た日本語の特徴がわかる	GW・講義	
5	日本語の使い分け①: <やさしい日本語>を通して、相手や場面による日本語の使い分けができる	GW・講義	
6	日本語の使い分け②: <要約筆記>を通して話し言葉と書き言葉の違いがわかる	GW・講義	
7	ことばを使わない日本語表現: 日本語のジェスチャーや日本人の会話の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを使用します。
8	私のことばを語る: 日本語の特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終レポートの詳しい説明も行います。

■受講上の注意

- ① グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
- ② 予習の必要はありませんが、復習・振り返りはぜひ行ってください。

■成績評価の方法

最終レポートで評価を行います。(最終講義終了後、期日内に提出。)構成(10%)、内容(80%)、表現(10%)。
詳細は最終講義で詳しく説明します。 レポートのタイトル:「日本語の特徴」。パソコンで作成してください(手書き不可)。

■テキスト参考書など

なし。

■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理してください。
前の授業資料を見る場合もあります。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

■実務経験

日本語音声学

講師: 奥村 三菜子

単位数: 1単位

時間数: 15時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

- ①日本語の音のしくみがわかる。
- ②日本語の話し方の特徴がわかる。
- ③自分の話し方の特徴に気づける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	日本語のリズム①: 日本語のアクセントの基本がわかる	GW・講義	
2	日本語のリズム②: さまざまなアクセントを正確に聞いたり書いたりできる	GW・講義	
3	日本語のリズム③: ・複合語のアクセントのルールが理解できる ・日本語のアクセントの特徴を自分のことばで説明できる	GW・講義	
4	日本語のいろいろな音①: 日本語の音のシステムの全体像がつかめる	GW・講義	
5	日本語のいろいろな音②: 日本語の調音点と調音法のシステムが理解できる	GW・講義	他科目で学習済みの「音声器官」の図と名称を復習の上、授業に臨んでください。
6	日本語のいろいろな音③: 日本語の調音点と調音法の詳細が正確に理解できる	GW・講義	
7	発話の誤り: 誤りのある発話を正確に聞き取り、その問題点が説明できる	GW・講義	
8	復習と振り返り: 日本語の音声的な特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終試験の詳しい説明も行います。

■受講上の注意

- ①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
- ②予習の必要はありませんが、復習・振り返りは必ず行ってください。

■成績評価の方法

最終試験(筆記試験)で評価を行います。(最終講義終了後の別日に実施。)試験は、聴解問題(40%)、多肢選択等の問題(60%)で構成されます。
最終講義で模擬問題に取り組みます。

■テキスト参考書など

なし。

■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理してください。
前の授業資料を見ることが多いです。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

■実務経験

言語発達学

講師: 提 雄輝

単位数: 1単位

時間数: 15時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

子どもがどのような過程でことばを習得していくのか。について学ぶ講義です。

ことばは生涯を通して形作られていきますがその中でも出生から学齢期までのことばの発達は言語コミュニケーションの基盤となります。この講義では、①どのようにことばが育まれていくのか？②ことばを育むためにはどうしたらよいか？③人はどのように文字を読めるようになっていくのだろう？④読みを育むことが出来るのか？⑤ことばの発達障害とはどのようなものか？など言語発達のイメージを膨らませていくことをサポートしていきます。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ことばの基盤について疑問を持つ	ガイダンス・GW 資料の確認	
2	始語期のことばについて	講義・GW 小テスト	
3	感覚運動発達ことば	講義・GW 小テスト	
4	語彙能力の発達について	講義・GW 小テスト	
5	統語能力の発達について	講義・GW 小テスト	
6	コミュニケーションの発達について	講義・GW 小テスト	
7	読み書きの発達について	講義・GW 小テスト	
8	試験とまとめ	講義・GW 小テスト	

■受講上の注意

何らかの配慮が必要な場合は申し出てください。ディスカッションの際は肯定的なことばを使用する。資料を揃えて講義に臨む。解らなかったことは解らないといえる。居眠りについては注意を受けることを理解する。

■成績評価の方法

授業への参加態度(10 %)、授業中のレポート・小テスト(30 %)、試験(60 %)により総合的に評価する

■テキスト参考書など

配布資料で講義を進めています

■備考

■実務経験

障害児教育学

講師: 片岡 美華

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

STとして障害のある子どもと接する上で必要となる、障害のある子どもたちへの教育の視点および、現在行われている特別支援教育制度を概括的にとらえることを目的とする。具体的には以下の二点を授業目標とする。

- ①障害のある子どもたちへの教育について、現代までの事績をつかみ、今日求められている障害のある子どもへの教育の意義と目的を明らかにする。
- ②特別支援教育の制度や法律を概括的にとらえ、連携や教育的支援の内容を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	特別支援教育とは何か。障害の概念(ICIDHからICFへの視点の転換)	講義	
2	障害児教育通史	講義	
3	障害児者の権利獲得の歴史と教育	講義	
4	障害児教育とインクルージョン	講義	
5	特別支援教育制度①(特別支援学校・センター的役割)	講義	
6	特別支援教育制度②(特別支援学級)	講義	
7	特別支援教育制度③(発達障害)	講義	
8	通常学級における特別支援教育(通級制度・ユニバーサルデザイン教育)	講義	
9	学校全体支援体制と特別支援教育コーディネーターの役割	講義	
10	保護者への支援と障害受容	講義	
11	家庭との連携と就学支援	講義	
12	関係諸機関との連携と個別の教育支援計画	講義	
13	障害者の自立～進路選択・就労支援・セルフ・アドボカシー～	講義	
14	教育相談と支援の視点	講義・演習	
15	まとめと試験	試験	

■受講上の注意

講義内容は、進み具合等によって順番や内容が若干替わることがあります。

■成績評価の方法

授業中に課すミニレポート(30%)と小テスト(5%)、および期末試験(65%)により総合的に判断する。

■テキスト参考書など

玉村公二彦・黒田学・向井啓二・平沼博将・清水貞夫編著:「新版 キーワードブック特別支援教育 ーインクルーシブ教育時代の基礎知識」(2019)クリエイツ
かもがわ
本講義では、教科書を基本としながら、適宜、視聴覚教材や補助資料を用いて理解しやすいように工夫する。

■備考

■実務経験

臨床発達心理士としての経験を生かして、事例を盛り込むとともに特に第14回の授業ではロールプレイングを交えながらより実践的に学べるようにする。

地域言語聴覚療法学

講師:下村 孝子、酒匂 久光、戌亥 啓一

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

本講義名は「地域」を冠しているものの、その内容は「医療」「福祉」「教育」といったリハビリテーションの活動領域を包括したものであり、リハビリテーション概論として、国際的な評価基準や各領域における専門用語、機器や器具を使用する方法、障害者スポーツ、症例との関わり・対応を含め幅広く学んでいくとともに、関連職種による「チーム」をもう1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携を学ぶ。

またリハビリテーションに関わる上で基本となる社会福祉、社会保障制度、関係法規について体系的に学習し、その内容を理解し、近い将来に赴く臨床現場(実習を含め)で、クライエントの利用可能な社会資源や必要な制度・関係法について、具体的にイメージできる能力を養い、制度を活かす方法を検討することができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーションの概要、ICFへの理解を深める。	講義	配布資料の要点をおさえる
2	リハビリテーションと障害についての基本的な専門用語を知る	講義	概念的な用語については特に留意して理解を深める
3	疾患・病期等からみたリハビリテーションへの理解を深める	講義	配布資料の要点をおさえる
4	障害に対するリハビリテーションへの理解を深める	講義	配付資料の要点を確認する 軽装を準備する
5	症例の生活に対応するリハビリテーションへの理解を深める	講義	配付資料の要点を確認する 軽装を準備する
6	リハビリテーションの一部を担う理学療法の役割とその職域を学ぶ	講義	事前に資料を配布します
7	理学療法における基本動作、リハビリテーション機器を体験する	講義・演習	機能訓練室で行う。 運動できる服装で受講してください。
8	障がい者スポーツを体験する。	講義・演習	体育館で行います。 運動できる服装で受講してください。
9	社会保障制度の概念を理解できる ライフステージ毎の社会保険制度を理解できる(年金制度、雇用保険など)	講義	
10	健康保険制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
11	介護保険制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
12	社会福祉に関する法律(主に障害者)の概要を理解できる	講義	
13	生活保護制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
14	社会福祉援助技術、リハビリテーション概論を理解する	講義	配布資料の要点をおさえる
15	終講試験とまとめ	試験・講義	前回までの内容を復習する

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

筆記試験(50%)講義を受講して感じたこと等をレポートして30分程度でまとめる(50%)

■テキスト参考書など

資料を配布

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士、理学療法士、社会保険労務士として実務経験のある教員による授業である。

地域言語聴覚演習Ⅰ

講師: 戎亥 啓一、専任教員

単位数: 2単位

時間数: 60時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

リハビリテーションは医療分野をはじめ福祉、教育など社会全般にその活動が広がっている。別の視点として「地域」という枠組みがあり、ここで必要な要素はやはりリハビリテーション全般に共通するものであるが、「地域」という視点を持ちリハビリテーションを考え、携わることには重要な意義がある。そして、関連職種による「チーム」を1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携についても学んでいく。

「地域言語聴覚演習Ⅰ」では、「地域言語聴覚療法学」で学んだリハビリテーション概論や、社会保障制度・関係法規の位置づけ、チームアプローチの重要性を認識し、言語聴覚士として「地域」における活動の実際と今後を見据えた視点を総合的に養うことを目標としている。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	施設訪問前オリエンテーションA、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
2	臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する 施設訪問経験者から必要な情報を聴取するとともに疑問点を解消、準備事項を具体化する	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
3	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(1)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
4	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(2)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
5	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(3)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
6	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(4)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
7	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るために、調査・検討を行う(1)	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
8	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るために、調査・検討を行う(2)	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
9	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(1)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
10	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(2)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
11	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(3)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
12	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(4)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
13	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(5)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
14	施設訪問前オリエンテーションB、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
15	臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する 施設訪問経験者から必要な情報を聴取するとともに疑問点を解消、準備事項を具体化する	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
16	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(5)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
17	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(6)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
18	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(7)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
19	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(8)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
20	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るために、調査・検討を行う(3)	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。

21 地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るために、調査・検討を行う (4)	演習・GW	社会活動全般の資料を参考することが役立つ。
22 検討案を実践することで検証一修正をする方法を学ぶ (6)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
23 検討案を実践することで検証一修正をする方法を学ぶ (7)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
24 検討案を実践することで検証一修正をする方法を学ぶ (8)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
25 検討案を実践することで検証一修正をする方法を学ぶ (9)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
26 検討案を実践することで検証一修正をする方法を学ぶ (10)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
27 実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする (1)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
28 実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする (2)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
29 実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする (3)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
30 実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする (4)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

レポート評価

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

言語聴覚障害学総論

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

【一般目標】

- ・言語聴覚士と言語聴覚療法について理解し、自己の職業観を究めることができる
- 【到達目標】
 - ・言語聴覚士の歴史的な流れとその意味を概説できる
 - ・言語聴覚療法の対象者について具体的に説明できる
 - ・言語聴覚療法の一般的な流れを説明できる
 - ・言語聴覚士に関する法律を概説できる
 - ・言語聴覚士ならびにリハビリテーションにおける課題や研究の意義を説明できる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士の仕事や定義について説明できる。言語聴覚士の歴史を理解し、未来について熟考することができる	講義・TBL	講義を聞き、他者と自分自身の意見を相互交換することを体験する
2	言語聴覚障害の評価・診断の概要を説明できる	講義	配布資料参照、要点をチェックする
3	研究の概要・倫理について理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
4	失語症・高次脳機能障害の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
5	発声発語障害の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
6	摂食嚥下障害の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
7	小児の言語障害の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
8	聴覚障害の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする

■受講上の注意

講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行う。

■成績評価の方法

レポート提出

■テキスト参考書など

配布資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語症学 I

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

- ・失語症の概要を理解する
- ・言語情報処理の認知神経心理学的モデルを理解する
- ・失語症の言語症状・古典分類を理解する

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症の概要	講義	テキスト①p24～25を予習する
2	言語情報処理の認知神経心理学的モデル(聴覚的理解・視覚的理解)	講義・TBL	テキスト①p26～27,p32～33,p40～41,p44～45を予習する
3	言語情報処理の認知神経心理学的モデル(呼称・書称)	講義・TBL	テキスト①p28～29,p36～37,p42～43,p46～47を予習する
4	言語情報処理の認知神経心理学的モデル(音読・復唱・書取)	講義・TBL	テキスト①p30～31,p34～35,p38～39,p44～45を予習する
5	言語情報処理の認知神経心理学的モデルを用いた言語症状の分析	講義・TBL	講義2～4を復習する
6	言語情報処理の認知神経心理学的モデルのまとめ	講義・TBL	講義2～5を復習する
7	失語症の言語症状(発話の障害)	講義・TBL	テキスト②p42～49を予習する
8	失語症の言語症状(聴覚的理解・復唱の障害)	講義・TBL	テキスト②p49～53を予習する
9	失語症の言語症状(読字・書字・計算の障害)	講義・TBL	テキスト②p53～57を予習する
10	失語症の近縁症状・随伴症状	講義・TBL	テキスト②p57～67を予習する
11	失語症の古典分類(プローカ失語、ウェルニッケ失語、伝導失語)	講義・TBL	テキスト②p76～86を予習する
12	失語症の古典分類(健忘失語、超皮質性失語、全失語)	講義・TBL	テキスト②p86～100を予習する
13	失語症の古典分類のまとめ①	講義・TBL	テキスト②p74～75を予習する
14	失語症の古典分類のまとめ②	講義・TBL	講義7～13を復習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従ってテキストで予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

筆記試験100%で60%以上を合格とする

■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト)テキスト①藤田郁代, 立石雅子, 菅野倫子 編集『失語症学』(医学書院)

■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である

高次脳機能障害学 I

講師: 松尾 康弘

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

脳血管障害等で生じる後遺症は、運動・感覚障害だけでなく高次脳機能障害も多く認められる。本科目では、脳機能を踏まえ、認知・行為のメカニズム、神経心理学の概要を理解することを目標とする。

- ・神経心理学の基本概念が理解できる。
- ・背景症状および各種失認症・失行症の定義および病態が説明できる。
- ・背景症状および各種失認症・失行症の評価および訓練法について説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学および高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第1章を予習しておくこと
2	神経心理学および高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第1章を復習しておくこと
3	視覚認知およびその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第2章を予習しておくこと
4	視覚認知およびその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第2章を復習しておくこと
5	視空間認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第3章を予習しておくこと
6	視空間認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第3章を復習しておくこと
7	聴覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第4章を予習しておくこと
8	聴覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第4章を復習しておくこと
9	触覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第5章を予習しておくこと
10	触覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第5章を復習しておくこと
11	身体意識・病態認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第6章を予習しておくこと
12	身体意識・病態認知の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第6章を復習しておくこと
13	行為・動作のメカニズムとその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第7章を予習しておくこと
14	行為・動作のメカニズムとその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第7章を復習しておくこと
15	試験・解説		試験・解説

■受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

■成績評価の方法

講義への参加態度(20%)・ワークシート提出(40%)・試験(40%)により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。60%未満の場合は再試験を実施し、60%以上を合格とする。再試験が60%未満の場合は再々試験を実施し、60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集: 標準言語聴覚障害学高次脳機能障害第3版、医学書院

■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学 I

講師:福元 恵美

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

定型の言語獲得過程を指標として、発達障害に伴う言語発達障害の特徴・評価法の概要を理解することを目標とする。

到達目標1:言語発達段階を知る

到達目標2:言語発達障害を知る

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達障害の概要について学ぶ	講義	言語発達学の復習
2	知的障害の概要について学ぶ①	講義	予習・復習
3	知的障害の概要について学ぶ②	講義	予習・復習
4	自閉症スペクトラム障害の概要について学ぶ①	講義	予習・復習
5	自閉症スペクトラム障害の概要について学ぶ②	講義	予習・復習
6	注意欠如/多動性障害の概要について学ぶ①	講義	予習・復習
7	注意欠如/多動性障害の概要について学ぶ②	講義	予習・復習
8	特異的言語発達障害の概要について学ぶ①	講義	予習・復習
9	特異的言語発達障害の概要について学ぶ②	講義	予習・復習
10	学習障害の概要について学ぶ①	講義	予習・復習
11	学習障害の概要について学ぶ②	講義	予習・復習
12	脳性麻痺・重複障害の概要について学ぶ①	講義	予習・復習
13	脳性麻痺・重複障害の概要について学ぶ②	講義	予習・復習
14	発達障害をもつ子ども・家族への対応について学ぶ	講義	予習・復習
15	単位認定試験・解説	試験、講義	これまでの復習をしておく

■受講上の注意

予習として指定された項目を読んでおくこと。

■成績評価の方法

- ・単位認定試験100点満点中、60点／100点以上を合格とする。・単位認定試験60点未満の場合、再試験を行う。
- ・再試験60点未満の場合、再々試験を行う。(再試験、再々試験ともに60点／100点以上を合格とする)

■テキスト参考書など

言語発達障害学第3版、医学書院 言語聴覚士テキスト第3版、医歯薬出版
その他の参考資料は随時配付する。

■備考

授業活動の状況により上記の内容・講義順番を変更する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学 I

講師:福元 恵美

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

言語聴覚障害学のうち、小児から成人までの発声発語障害領域を学ぶ。発声発語障害に関する基礎的な知識(解剖・生理・音声学等)や病態、その他、理論的背景や音声の一般的な記録法を学び、発声発語障害を全体的に捉えることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	話すことば(Speech)の障害と言語聴覚士の関わりについて理解する。	講義	話すことば(Speech)の障害に対して、言語聴覚士が行う支援について説明できる。
2	機能性構音障害について理解する。①	講義	復習
3	機能性構音障害について理解する。②	講義	機能性構音障害の定義・特徴・言語聴覚士としての関わりについて説明できる。
4	異常構音について理解する。	講義・演習	復習
5	構音の誤り方について理解する。	講義・演習	復習
6	器質性構音障害について理解する。	講義・演習	器質性構音障害の定義・特徴・言語聴覚士としての関わりについて説明できる。
7	運動障害性構音障害について理解する。	講義・演習	運動障害性構音障害の定義・特徴・言語聴覚士としての関わりについて説明できる。
8	発声発語障害の評価ができるようになる。①	講義・演習	発声発語器官の評価について理解する。
9	発声発語障害の評価ができるようになる。②	講義・演習	発声発語器官の評価について理解する。
10	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの復習をしておく。

■受講上の注意

※授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

受講態度・提出物等(10%)、筆記試験(90%)とし総合的に評価する。

■テキスト参考書など

言語聴覚士テキスト 第3版、医歯薬出版

■備考

適宜資料を配布します。

授業活動の状況により上記の順番等を変更する場合もあります。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅱ

講師:川元 真由美

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

発声発語障害学Ⅱでは発声発語障害のなかでも流暢性障害(吃音)に関する理論と技術を学ぶ。吃音は幼児期に始まり発達・学習・環境などの多要因が関与すると考えられているものの、他の言語聴覚障害の領域に比べると未だ解明されていないことが多い。正しい知識を有し、患者様やご家族と向き合える知識及び技術を習得することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	吃音体験談をとおし吃音の症状・心理的側面について考える。	講義・演習	吃音の症状について説明できる。
2	吃音の概要① (定義とメカニズム)	講義・演習	吃音の定義について説明できる。
3	吃音の概要② (発達性吃音・獲得性吃音・クラタリング)	講義・演習	発達性吃音・獲得性吃音・クラタリングについて説明できる。
4	吃音の概要③ (近年の研究・他疾患との鑑別)	講義・演習	吃音の概要について説明できる。
5	吃音の評価① (評価の流れ・情報収集)	講義・演習	吃音症状を理解し、臨床の流れについて説明できる。
6	吃音の評価② (吃音検査法 第2版)	講義・演習	吃音検査法の目的を把握し評価法について学ぶ。
7	吃音の指導・訓練① (直接訓練・間接訓練)	講義・演習	各訓練の目的を把握し訓練内容について説明できる。
8	吃音の指導・訓練② (環境調整)	講義・演習	環境調整の目的やアプローチの内容について説明できる。
9	吃音の指導・訓練③ (セルフヘルプグループ)	講義・演習	セルフヘルプグループについて説明できる。
10	終講試験およびまとめ	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

授業への参加態度及び課題(10%)・単位認定試験(90%)により総合的に判断し、60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版、医学書院
※適宜資料を配布する

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学 I

講師: 戎亥 啓一

単位数: 2単位

時間数: 40時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

■科目目標

聴覚障害は目に見えない、他者に気づかれにくい障害である。そのため障害についての理解や当事者の心中を推し量ることは難しい。言語聴覚士は聴覚障害に対する専門職であり、この分野における各方面からの期待は大きく、言語聴覚士を目指す本講義の受講者には聴覚領域に対して興味と関心をもってもらえることを目標の1つとしている。

受講者においては、聴覚の仕組みを理解し、その上で聴覚障害の種類と特性を知り、言語聴覚士として各種聴覚検査や助言、指導、訓練を行うための知識を身につけることが就業までの目的となる。本講義は導入の位置づけにあり、聴覚領域の講義は上位学年も含め複数の設定されていることから、まずは本講義を通して基礎的な理解を十分に得ることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害の基礎知識について理解を深める(1) 耳が音を感じる仕組みと構造	GW・講義	他の講義や教科書であいまいな点を1つずつ解消していく
2	聴覚障害の基礎知識について理解を深める(2) 難聴とは? 音と聴覚器と伝導路について	GW・講義	全体像から局所の理科愛に進むようにする
3	補装具や補聴援助機器から聞こえや聴覚についての理解を深める	演習	試聴前にイメージをもちギャップを楽しむ
4	聴器の発達と脳科学からの視点について理解を深める	GW・講義	発達の知識との関連性を意識して抽出する
5	頻度の高い難聴のタイプとその特徴による影響について理解を深める	GW・講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る
6	聴覚障害のさまざまな原因と影響について理解を深める	GW・講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る
7	聴覚の検査の種類や特徴を把握し今後の講義につなげる	講義・演習	聴器の構造や障害のタイプが密接に関係していることを知る
8	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める(1)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
9	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める(2)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
10	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める(3)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
11	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める(1)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
12	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める(2)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
13	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める(3)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
14	日本語の音と聞こえについて理解を深める	GW・講義	日本語を詳しく知ることの重要性を知り、その科学的特徴を整理する
15	日本語の音の聞き取りづらさや聞き間違いから聴覚障害の理解を深める	GW・講義	日本語を詳しく知ることの重要性を知り、その科学的特徴を整理する
16	両耳聴の効果から聴覚の機能について理解を深める	GW・講義	聴覚のさまざまな機能についてまとめる
17	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める(4)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
18	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める(5)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
19	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める(6)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
20	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

筆記試験

■テキスト参考書など

病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア
配付資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法管理学 I

講師:専任教員、松下 裕二

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、ソーシャルスキルの基礎知識、職能団体の理解、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の活動内容、多職種連携について基本的な事項を中心に取り上げる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ソーシャルスキルの重要性と学生生活において具体的に取り組むことを知る	講義・演習	般化を心掛けることが重要となる
2	ソーシャルスキルの実践と応用を学ぶ	演習	般化を心掛けることが重要となる
3	言語聴覚士から職能情報を得て職業イメージを強くする(1)	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
4	言語聴覚士から職能情報を得て職業イメージを強くする(2)	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
5	言語聴覚士から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(1) 情報取得のプロセスを確認・構築する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
6	言語聴覚士から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(2) 情報取得のプロセスを実行し、ソーシャルスキルを活用する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
7	言語聴覚士から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(3) 情報取得のプロセスを実行し、フィードバックを実践する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
8	多職種連携の意味と共同の目的を学ぶ	演習	

■受講上の注意

■成績評価の方法

参加・計画資料・レポートを項目としたルーブリック評価による。

■テキスト参考書など

適宜配布

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

臨床言語聴覚療法 I

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年、授業学年:2学年

必修選択:選択必修

■科目目標

- ・神経心理学的検査を被検者として、体験し、検査の流れ・内容を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1 神経心理学的検査演習①		TBL	検査マニュアルを予習する
2 神経心理学的検査演習②		TBL	検査マニュアルを予習する
3 神経心理学的検査演習③		TBL	検査マニュアルを予習する
4 神経心理学的検査演習④		TBL	検査マニュアルを予習する
5 神経心理学的検査演習⑤		TBL	検査マニュアルを予習する
6 神経心理学的検査演習⑥		TBL	検査マニュアルを予習する
7 神経心理学的検査演習⑦		TBL	検査マニュアルを予習する
8 単位認定試験・解説			試験・講義 講義1~7を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

実技試験100%で60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

■備考

TBLとは、能動的学习を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚研究入門

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:1学年、授業学年:2学年

必修選択:選択必修

■科目目標

高度専門士を目指す学生として研究法を理解することは重要である。「言語聴覚研究Ⅰ・Ⅱ」につながる研究活動の基礎を理解したい。

①適切な用語を使用し文章表現ができる ②論文の構成を理解する ③既存の論文や教科書を検索する方法を学ぶ ④引用・参考を活用できるようになる ⑤適切な用語を使用し発表ができる 以上を本講義の目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	研究について概要を理解する、研究の流れを把握し、今後の活動をイメージする	講義・演習	あいまいな点を指導者に確認するためリストアップする
2	担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な流れを知る	講義・演習	担当指導者との連絡手段を確認する
3	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
4	企画書の作成、計画立案を通して、研究の流れを把握する	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
5	情報収集とデータ収集の方法を活動を通して知る(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
6	情報収集とデータ収集の方法を活動を通して知る(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
7	情報の分析と活用の具体的流れを経験し、図表作成および文章化する(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
8	情報の分析と活用の具体的流れを経験し、図表作成および文章化する(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
9	情報をまとめ、適切な形式で表現する手段と方法を知る(1)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
10	情報をまとめ、適切な形式で表現する手段と方法を知る(2)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る

■受講上の注意

本講義は担当指導者との個別指導を中心に実施される

■成績評価の方法

発表内容などにて評価する

■テキスト参考書など

適宜使用

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。